



地域包括ケアセンターいぶき
畑野 秀樹 医師



『いのち』の大切さを伝えるのも私たちの仕事。

朝5時に往診に行ったときには、家に入る前から泣き声が聞こえ、本当に家族に愛されて旅立って行かれました。

高齢者の『いのち』が、ちゃんと子どもや孫につながったと思いました。



夏の伊吹山は緑豊かで、空気もとてもすがすがしかった。往診中、車の前を鹿が通過したのには驚いた。

伊吹山のふもとに建つ地域包括ケアセンターいぶき。

診療所、介護老人保健施設、居宅介護支援事業所、訪問看護ステーションと4つの機能を備えています。

滋賀県の「名物医師」に会うためにここを訪れましたが、ここで驚いたのは名物医師だけではありませんでした。

医師・看護師・介護士・作業療法士・理学療法士などの医療者と、患者とその家族、地域の人々の関係が素晴らしく、皆がこの地域を愛し、この地域をより良くしたいと思う気持ちが伝わってきました。私達は、過疎地に暮らすお年寄りは充実した医療が受けられない、と思いがちです。しかし私がここで見たのは、日々の暮らしを大切にする、とても充実した医療でした。



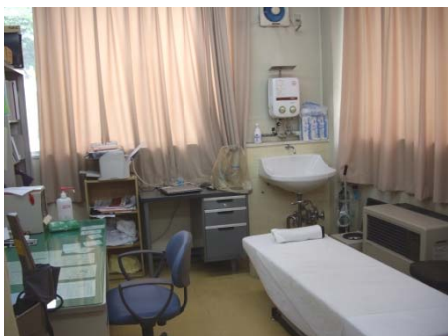
ケアセンターいぶきの2階は介護老人保健施設。まるで家にいるかのような、くつろげる雰囲気が印象的だった。



板並出張所。診療所の待合室にいる患者さんは皆お互いに顔見知りで、とても和気あいあいとしていた。



吉槻診療所。ケアセンターいぶきはそれぞれ2つの診療所・出張所をもち、医師が担当を決めて回っている。



吉槻診療所の内部。このような診療所があるからこそ、高齢者は歩いて受診に来ることができる。

● 生活を大切に

最期の時を長年暮らしてきた我が家で迎えたい、という人はとても多いと思います。しかし日本では病院で亡くなる人がほとんどです。なぜ自宅で死を迎えることができないのか。それは、何かあったときに大変だからと家族が入院を望んだり、昼間家族が仕事に出ている間に世話をする人がいない、などの理由からです。

しかし、「ケアセンターいぶき」は家での生活をとても大切に考えます。容態が急変した時のことが心配でも、24時間いつでも電話が繋がる。昼間家にいなくてもヘルパーさんが来てくれる。もちろん、医師による往診も行います。このようにして、高齢者が自宅で過ごすことができるようサポートすること安心が生まれ、在宅が可能になるのです。長年住み続けた家から離れたくない、と一度入院したものの再び自宅に戻ってきた人もたくさんいます。

自宅で過ごす様々な病気をもった方々が本当に幸せそうに生きている姿が印象的でした。

● 『いのち』の大切さをつなぐ

家に帰るとおじいちゃん、おばあちゃんがいて、今日あった出来事を聞いてくれる。その人たちがいつの間にか年をとり、病気になり、徐々に体が不自由になってくる。そのうち寝たきりになり、そして家族の皆に看取られながら亡くなっていく。少し前まで、日本ではどの家庭でもこれは一般的な光景でした。高齢者の老いや病気、死を通して、子どもの頃から『いのち』を実感することができました。しかし核家族化が進み、家の中で高齢者と触れ合う機会がほとんどなくなってしまった今、『いのち』とは何か、全く考えもしないまま、大人になってゆくようになりました。いのちの大切さ、尊さを知っている人は、いのちを粗末にすることはありません。高齢者が病院ではなく家で暮らすことができれば、『いのち』の大切さは伝わるのではないのでしょうか。